

い戦であったのです。

通信部隊の裏方話

福岡県 長谷川 幡 尊

火の雲走る大陸の

空に聳える山幾重

汗と血潮にそめなて

行け山西の地の限り

昭和十八年一月、私が初年兵として現地入隊のため
広島に集結させられ、三日間広島に滞在後、夜行列車
にて広島駅から下関経由、関釜連絡船「金剛丸」船底
の三等船室に二百人位の兵隊がスシ詰め状態で押し
込まれ、エンジンの轟音で眠れぬ一夜を過ごした。

これで私も再び祖国の土が踏めなくなるのかと心の
底から母や弟に別れを告げつつも、再会を念じながら
遠く離れゆく祖国の灯が見えなくなるまで、真暗な玄
界の船上から永遠の別れを告げた。

翌朝、小雨の釜山に入港、付近の小学校で列車のく
るまでの一時を待機し、列車到着と共に釜山より乗車
出発した。この列車の中で初めて我々の行先が北支大
原電信第九連隊であることを知らされた。

冒頭の軍歌は我々を受領にきた古参兵の人達が教え
てくれた山西派遣軍の隊歌の一節である。私は歌が好
きであるためか、五十年経った今でも不思議に忘れる
ことなく、戦友会や何かの時に歌うが、一般の旧式軍
関係で北支にいた人でも知らない人が多く、他の人が
歌っているのも聞いたことがない。

いずれにしても真夜中に、鴨緑江の大橋を渡り、白
銀一色の満州の地に入った時は、なるようにしかなら
ないな気持ちで、運を天に任せる以外にはないと、
かえって気が楽になったような気持ちであったのも事
実である。

再び乗車二泊の後、早朝に大原に到着したように記
憶している、私は防寒服を装着していたが北支の寒気
は想像以上に厳しく、寒いというのではなく肌を刺
すように痛い寒さである。

我々の電信第九連隊は大原の城内から歩いて約三十分の位置にあったように覚えている。到着したその日はお客様扱いであったが翌日からは通常の内務班生活が始まり、初年兵教育も正式に開始された。

教育は送受信術で、他に学科があり、歩兵部隊のような戦闘訓練は週一回程度で、銃剣術や、たまに軍事教練がある程度であった。この点通信部隊の無線班に編入されたことは一応死から少しは遠い位置におかれたと感謝していた。であるが軍隊であることに変わりなく、内務班での生活は、話では聞いていたが、人間的な扱いはほとんどされず、僅か一年先に入隊した者が教育の名のもとに、僅かな間違いでもいろいろなる方法で傷めつけ、全く人綱を無視した行為を柔しみのように行っていた。

こんな行為を見て見ぬ振りをして、将校、下士官、こんな行為が真に軍人精神向上に役立っていたのであろうか。

大東亜戦争の敗因も戦略戦術の齟齬、経済力、物量不足もさることながら、第一線で真の戦力となるべき

兵士達が内心は嫌やいやながら戦闘に参加したものと
思う。私は「平和の礎」を読み、各地における地獄さ
ながらの戦場の中で死んでいかれた兵士達を想うとき、
この人達に対し深い悲しみを感じると共に、この不幸
な戦争をおこした軍の上層部の人達は些かたりとも反
省の気持ちはあるのか。むしろ自らを英雄視している
のではないかとさえ思う。

ともあれ私は二度と悲惨な戦争に、国民、否全人類
を巻き込んで貰いたくない一心でこの文を書いている。
昭和十八年六月末頃、一期検閲も終わり、星二つの
一等兵となったが、初年兵の標識は引き続き剣がされ
ることなく、内務班での生活は相変わらずではあるが、
多少要領も覚え、使役の合間を縫って鉄拳より逃げる
方法を考え、夕食後は内務班に残らないようにした。

この点は軍隊生活で覚えた悪い面の一つであろう。し
かし仕事の迅速性を身につけ、生活の規律を習得した
ことは自然と除隊後の日常生活にも生かされているこ
とは、軍隊生活(集団生活)による影響と想っている。

一期検閲後一か月経過した頃、無線中隊は陽泉とい

う町に作戦で出動し、陽泉市内のある寺院に通信所が開設され、初めて実戦の通信任務に従事した。

私は元来は通信士ではなく、技術者であったので一応モールス符号は覚えているが、実際に電鍵をにぎり、モールの送受信を練習したのは入隊してからであり、六か月程度の練習ではとても専門職のように、一回の受信のみで全文完全受信は不可能である。やむを得ず再三にわたる再送要求により受信できる程度で、全くお手あげ状況であった。そのようなある日、突然連隊本部に帰隊するよう命令があり、下士官二名、兵三名が一月余の前線生活を離れ帰隊した。帰隊したら早速南方への転属命令であった。

季節は十月下旬頃であり、服装も冬服であったが、翌日は夏被服に交換させられた。内務の整理整頓で一日を送り、次の日は下士官一、兵は私ほか二名、大原駅より車中の人となった。

途中でどこでどう經由して走ったのか不明であるが、車内で初めて南京の第五航空固定通信隊に転属するのだと知らされた。南方地域でなく良かったと安心した。

緒戦こそ戦局は日本側が優勢であったが、その後南方戦線では制空権も次第に失われ、地上戦においても敗色は濃厚であり、その損害も甚大である模様である。中支南京は中国の首都であり、そこに第五航空軍が軍直轄部隊として駐屯しているのであり、まだ直接戦闘に巻き込まれる心配はなかった。

列車の中で二泊したように覚えているが、朝十時頃、南京の対岸の終着駅浦口に到着、船で対岸の南京に渡り、迎えに来ていたトラックに乗車、市内の目抜き通りを通り抜け、城内飛行場とクリークによって隔てられた赤レンガ造り一部三階建の営門に入った。到着の申告後営舎に落付き旅装を解き身辺を整理した。

到着してすぐ判明したのであるがこの部隊は各地からの寄せ集めの新設部隊で、隊員はほとんど二年兵以上で、初年兵は一内務班に二、三名程で私もここでは半年サバを読み二年兵顔で振舞った。お陰で食事当番や種々の使役をのがれ、最後までバレルことなく二年兵で押し通した。

二、三日後に再び通信術の教育があったが、私は教

室での通信術ではほとんど上位の成績であったためか、南京の連隊本部に残り、出先関係では漢口、広東、台湾、済南外二個所程の小隊に編入されずにすんだことは運命といえますか、そのために命を長らえたといっても過言ではありません。一週間程してから市内にある第五航空軍司令部内の合同通信所（合通）勤務となり、宿舍は合通と一緒に内務班で日常の勤務は楽しく生活することができた。

私が指定された通信系は東京大本営との最高重要通信系で、東京側の通信担当者は私のごとき一夜漬けの通信手でなく、通信省より採用されたベテラン通信士でとても私の歯の立つ相手ではない。平均速度百二十字位で、最も機密度の高い暗号数字での通信であるので、こちらが緊張すればする程脱字がある。再度再送信を要求すれば『へボ、交代せよ』の痛烈な回答、すぐ監査通信所より通信所に電話で通信手変更の要求があった。通信所長である小隊長も止むを得ず通信手を交替させた。屈辱的気持ちになるがあたりまえのことです。仕方の無いことである。

小隊長、班長の配慮もあり、閑散な通信系で練習を兼ねて交信を行い通信術の向上に努めていた。その折、南京の送信所に五キロワットのこの時代では最大出力の最も新しい送信装置が送られてきた。設置場所は南京郊外にある菊花台送信所に決定されたが、取付工事及び調整工事全部を民間業者に委託せず、軍で施工することとなった。そのためには無線技術者が必要であったが、五固定の送信所勤務者では水冷式の大電力送信設備の経験者が不在のため、入隊前通信機メーカー勤務であった私に白羽の矢が立てられ、その任務に私が命令された。

私は通信に自信がなく困っていた時でもあり、水を得た魚のように喜んでその作業に従事することにした。翌日は早速菊花台送信所に移り、送信所長に転属の申告をした。建設班長には仙台出身の佐藤兵長が任命され、上等兵の私と他に一名の上等兵計三名で作業を行うことになった。送信装置は全部で五面、一台約一トンもある重量物である。貨車で既に菊花台駅に到着していた。

我々の作業は貨車からトラックに積み替えて送信所まで運搬せねばならぬが、前述のように重量一トンもある物体であるため五人や十人の人手では簡単にトラックに積み替えることができない。このため飛行場にあるクレーン車の使用を願い出たが、同じ航空部隊でも部隊が違うと簡単に借用できず、人力でやれとの命令、止むなく使役二十人程を願い出たところ、これはすぐ許可になり、非番の者が出て応援してくれることになった。しかし悲しいかなこのような重量物を扱った経験者は一人もおらず、佐藤兵長に私は指揮をまかせて貰い、バール、コロ、渡り板等をなんとか取り揃え、一日がかりで二台を搬入するが精一杯であった。

私達が民間人であればクレーンを利用する事により一トン位の荷物五個位は半日位で完了できるのが、二十人の人力で行うため二日もの日数を要する非能率的極まる方法、上司の命令が如何に粗悪であろうとも、反対することのできない軍律に縛られて、身動きのできない状態が軍隊であると感ずるようになった。

この建設工事は企業として施工した場合、工期は約一か月で完工せねば利益にならない。この建設には夜間工事を入れて約三か月の日時を要した。材料不足のため代用品を探して配線工事を行い、また二十五メートルの電柱も有線班の兵力で四本建柱し、短波の東京向けのアンテナを我々の手で完了した。

私自身とても良い勉強になり、復員後会社に大いに役立ったことに対し感謝している。取付工事は送信所全員の協力を得て、昭和十九年二月に機器搬入より五か月後の七月十日頃送信可能となり、東京と連絡できた時は今までの苦勞も一気に吹き飛んだ。その後は中山陵下にある幹部候補生学校の一室を借り受け受信所建設を二か月程で完了した。

送受信所の建設により東京系の通信は、今まで手動だったものが高速度の自動受信方式に変わり、その後の東京系通信はテープを流すのみで人手を要しない正確な通信が可能となった。作業遂行に大いに貢献したものと思われる。

しかし戦局は「平和の礎」に皆様が述べておられる

通り、昭和十九年頃より玉砕に次ぐ玉砕、海軍もその主力のほとんどが南海の藻屑となり、今も英霊は海底深く静かに横たわっている。

南京勤務時代に二回空襲があり城内飛行場に機銃掃射があった。戦局は日増しに悪化し、いつ我々の送信所も空襲の被害を受けるか判らないため、小型の送信装置は雨花台の山の中のトンネル（いつ作られたか不明であるが）に急ぎ移設し、地下防空壕での送信所勤務となった。ただし五キロワット送信装置は大きくて重いため搬入できないので、地上に鉄筋コンクリート製の大型防空壕が作られ格納された。

しかし今度の工事は先の工事と異なり、機械が作動すればよいとのことで丁寧な工事は行われず、一か月で作業は完了した。私達末端の兵隊たちは戦局等の事は一切知らされないが外出時に中国人から日本は駄目というような話が耳に入り、また夜間勤務の折、受信機の周波数を外国のラジオに合わせ日本向け、日本語放送を聴くと、どこどこでは日本軍は壊滅的敗北とか、海戦において何隻の巡洋艦が撃沈された等、日本

に不利な放送ばかりであった。

一方、新聞では特攻機が体当たりで敵空母一隻を撃沈、外に多大の損傷を与えた等の報道で、これも大本営発表の受け売りでどこまで真実かも不明。いづれにしても日本存亡の危機であることは膚で感じられた。

私達建設班も送受信所建設完了に伴い自然解散の状態になり、私は菊花台送信所勤務として日夜送信機のお守り役で、故障等が発生すれば夜中でも叩き起こされ修理のために不眠の時も再三あった。

昭和二十年七月中旬頃、私は本部の兵器係に配置されたある夜の点呼時、部長より当部隊にも特攻要員が割り当てられたので希望者は一歩前へ出よとの話があった。しかしすぐに応じる者もなく、二日後までに申し出るように話があった時、「ああこれで日本も終わり」とそれまでかすかながらもっていた家族との再会の望みもブツリ切れた想いであった。

そのような日から僅か一か月も経過しない昭和二十年八月十五日、あす昼過ぎに重大放送があるから航空軍司令部に全員集合の命令が出された。時間は忘れた

が丁度昼頃であつたと思う。司令部前庭一杯に将校、下士官、兵が立ち並ぶ。スピーカーから「只今より天皇陛下の重大放送があるので静聴するように」との達しが流された。雑音のまじった中から天皇の少し痾高い声が聞こえた。しかしその内容は難しい勅語形式の文と雑音のために意味は全然分からなかった。

私は戦局が最終的段階に立ち至つたので国民全員頑張れという激励のお言葉であると想っていた。後で参謀長の訓話で終戦の詔書であることが分かり、ああこれで日本に帰れる、自由になったという思いで心中喜びに満ちたことは事実であつた。当時は今後の生活のことと日本の国の行く末とかを考える余裕がなかった。この時の気持ちは軍人人間を問わずみんな同一ではなかったかと思う。それから二、三日は放心したような、無気力で何の考えもない日々を過ごした。

その後、日付は判然としないが城南飛行場に重慶軍が南京接收のために来るといので、我々は宮内より一步も外に出ることが禁ぜられてその当日を待った。その当日は都通前に近くの民衆が黒山のように集まり

重慶軍の到着を待っていた。二十数機の大型機が着陸、隊列を整えたアメリカスタイルの中国兵たちが整然と行進する姿を見たとき、中国にもこんな立派な兵隊がいたのかと心の中から驚いた。私の胸に描いていた中国兵は、銃も種々雑多、服装もバラバラ、天秤棒に籠をぶらさげ中には炊事道具まで入れてある有様、そのような認識しかなかったので大変な驚きであつた。この光景を見た時からはっきり日本は負けたのだという認識を強くした。その時から帰国を一日も早くと願う気持ちが強くなったような気がする。

この時、第五航空軍は既に南京から朝鮮のソウルに移動していた。五固定本部もこれに随行して移動し、本部は無人となつていた。私達一個小隊は支那派遣軍総司令部の中に吸収されていたのであるが、我々兵には何も知らされていなかった。この事実が判明したのは復員数日前であつた。この場に至つても一部上層部のみ判断で我々は置去りにされたのである。

さて数日後、中国側に全部の武器を接收されることになる。我々の武器は通信機器が主体で個人の保有す

るものは小銃位のものである。接収はされても書類上のことのみであり機器は今まで通り配置されており、東京系その他各系統の機器は復員業務用に日本側が借用の形で使用することになり運用されていた。

例えば漢口地区で日本人が全部引き揚げたような所は、不要となったため中国側が使用していたようであるが、中国の人達はその機器の運用ができるまでは日本側で指導にあたり、また故障等の場合は中国側で修理できないので日本側に修理の要請があり、その都度私が修理を受け持ち結構忙しい毎日であった。そのためか私は中国より技術者として徴用されたかたちで日常の一般業務よりは開放され、突発的事故の際にはジープで他の通信所にも行き点検修理を行っていた。

兵隊の位も兵長になっていたが、小隊長よりも優遇され中国側の所長とも食事を共にし、兵隊達とも親しく交友することができた。其は身を助けるとの諺どおりであり、通信技術者として一貫して通してきたことが役立ったので本当に良かったと思った。他の人達は従来通り復員業務通信のため昼夜それぞれの部署で動

務していたが、系統数も少なく僅かな人員で十分仕事できた。余剰の人員はすることもなく、手造りマーシャンパイでゲームに熱中していた。初めてマーシャンを覚えた人も多いと思う。

街には中国奥地よりの復員途中南京に残留を命ぜられ、市内の清掃を命ぜられていた部隊、それに引き換え今まで以上に優雅な生活を続けている司令部の人達、天と地の相違を感じ、相済まない気持ちであった。その人達をそつと横目で見ながら中国兵の運転するジープに乗り、他の送信所の修理に行く途中など本当に気の毒に思わずにはおられなかった。なお、このことはほとんどの人達は知らないことと思うが雨花台は昔は処刑場であったとのこと。戦後、重慶政府は南京で蔣總統が主席となり中国政府を再建したわけですが、戦争中の反逆者である汪政權の要人達が漢奸として極刑の裁きを受け統殺の刑を受けた。

彼等は三人宛トラックに乗せられ罪状を書いた立板と共に南京市内を引き廻され、雨花台の刑場に到着、数百人の群衆の見守る公園のような広場で次々と処刑

されていた。処刑の方法は高手小手に縛られ横一列に座らされ、後方二メートルの所に小銃を持った兵士が並び、指揮官の命令とともに発射、その瞬間前に倒れ絶命。私も五日位見たが、その都度思ったことは、勝てば官軍、負ければ賊軍というのはどこの国でも同じである。我々は敗戦後丁度一年中国南京に残留した後復員、その間民間人の人達の帰国のための通信業務のため毎日を忙殺されてきた。

私達にも中国側から帰国が近いとみて、技術者として残って欲しい、勿論身分は中尉相当とし官舎も支給するとの条件で参謀から話があった。しかし当時は帰心矢のような心理状態であったのでこれを断ったのであるが、数日後条件を繰り上げて大尉相当官にするからと再度申し入れがあった。私の気持ちは変わらずこれも断った。参謀はあまり断り続けると強制徴用もあり得ると半ば脅かしのようなこともいつてきた。私の心も動揺して残留に応ずる考えになりかけたが、故国の家族を思うときやはり断ることにしてこの事を伝えた。

戦友達はいつでも帰国できるように身の廻りの整理を始めたが、私の場合は中国側の強い残留要請を考えると気分も落ち着かず、イライラした毎日であった。

七月初旬のある日、「今日深夜迎えに行く、荷物はできるだけ最小限にして待機せよ」との連絡があり、中国側の人達に分からないように身支度を整え待機した。夜中の十一時過ぎトラック二台が迎えにきてくれ、我々は電源スイッチを切り、夜逃げ同様に菊花台を後にした。しかし城門まで来てみると門は閉ざされ夜明けにならぬと開門できない規則とかで止むを得ず四時間位待たされ、夜明けと共に開門、一路港に向かった。私達の到着を南京港で待っていた輸送船に到着とともに乗船した。

中国に來た時のようなスシ詰め状態でなく船室にも余裕があり身を横たえることのできる状態であった。我々の乗船完了と共に程なくして離岸出航した。船は揚子江を下り上海に向けて航行するのであるが、私は中国側の残留要請を振り切って逃げ出してきたので、上海到着と共に逮捕抑留されるのではないかと戦々

競々としていた。無事何事もなく帰国できるよう神に祈るはかなかった。

全く生きた心地がしないということはこんな事かと日本に到着するまで心が落ち着かなかった。船は翌朝無事上海埠頭に着岸、大きな倉庫が立ち並び一万吨級の船が何隻も着岸していた。その中の船の船尾に日の丸を見た時、感激で胸がつまり涙があふれたことが今でも記憶にありありと残っている。

上海では倉庫のような所に一泊し、翌日アメリカ兵立ち会いのもと所持品検査が行われた後、日本の貨物船に乗船、倉庫内に作られたカイコ棚のような所に各小隊、分隊毎に収容された。この船は復員船としては最後の船で、支那派遣軍総司令部が最後まで復員業務に携わった将兵だけで、全員で二百人から三百人位ではなかったかと思う。最高位の人は中国側に戦犯として残置された総司令官以外、中将か少将か不明であるが参謀や他の将校も相当数乗船していた。乗船は二時間位で完了、午後一時過ぎ静かに上海埠頭を離れ、幾多の想い出を残して上海を後にした。

出港時の揚子江の水は黄色の混濁した色であったが、やがて広大な河口に至り海に入るにつれて水は青い色に変わっていった。支那海に出たようであり、再び来ないであろう中国に對しやはりなつかしい想いで、振り返って、遠く視野より消え去る中国に静かに手を振った。

船内は蒸し暑く、とても寝られる状況でなかったが故国に帰れる喜び、それに安堵の気持ちがあり、いつしか夢の中へ。翌朝目がさめて沖合はるか彼方に鹿児島山々が望見できた時は、心からこれで日本に帰れたことが実感となった。中国での三年有余の生活がはるか昔のように思えてならなかった。その後一昼夜船内生活を送ったが、一日一人水はコップ三杯位、一汁一菜的な食事も全然苦にならなかった。

我々の船は七月十日浦賀港に入港したが、検疫の結果、果何人かに赤痢の疑いあり、一週間上陸禁止となり、浦賀沖で街の灯を見ながら一週間を無為に過ごした。船内ではその間英語教室やその他文化教室等が開かれたようであった。一週間後再度の検疫の結果、前回の

赤痢の疑いは解消され全員が上陸、徹底的な消毒を受け、十数日ぶりに入浴し一泊の後、復員完了を告げられ、僅かな旅費を支給され、それぞれが明日からの健康を誓いあって最後の別れを惜しみながら懐かしい家路についた。

戦友はビアク島で玉碎

—航空兵転科で生き残る—

岩手県 藤 尾 健 造

私は大正十年二月一日生まれ、昭和十六年徴集兵として、昭和十七年二月十日、第三十六師団、第二二三連隊（雪三五二三部隊）要員として弘前の部隊に入った。一週間後、下関から山西省の遼東へ行き、自動車で原野の中、禿山を越えて可成り奥地へ入った。新兵でないと思わせるため偽装の階級章を付けていたが、途中共産八路軍に襲撃も受けた。

北支の二月は寒さが厳しかった。防寒外套を着てい

たが、明治三十年代のもので、私には大きく袖を返したり、腰上げをした。私は甲種合格で体は大きい方だったが、当時の先輩たちからは、「今の甲種合格は体が小さいな」と言われたくらいだから、以前の兵隊は体が大きい。そのためか服も大きかったのであろう。飯盒は柳行李で、多くの弾薬と一緒に持っていたが、小銃は五人に一挺の見せかけで、小銃、帯剣と認識票（私のは二二二——一——三四六、で今でも覚えている）を渡された。

寒い中で、教育を受けるより直ぐ警備についた。まだ馴れないのに分屯隊の勤務にもついた。それは古兵との交替だったからだだった。その陣地はトーチカで、一個分隊ぐらいで警備勤務をしていた。

その当時の思い出は、絶えず八路軍のチャルメラのようなラップを聞いたり、同年兵で手や足を引っ張られたりし危うく拉致されそうになった者もいた。小銃と実弾を常に持って、常に完全武装だった。私は十一年式軽機関銃の射手になったが、重い（四キロ弱）ので、行軍や戦闘行動で頸を出したこともある。